1970 年代の果樹栽培を支えていたもの
～特産物を通じた地域づくり研究:
長野県中野市上今井地区を事例として～

藤田　りよ子

1970 年代、高度経済成長の影響を受けて、農業は撤退や兼業化の動きが多く見られるようになった。しかし、長野県中野市上今井地区では、専業農家として果樹栽培を続ける道を選んだ農家が少なくなかった。リンゴ産業崩壊の危機に直面するも、人々は品種更新によって危機を乗り越えたのであった。そのような転換期における果樹栽培の実態とはどのようなものであろうか。また、リスクを背負いながらも、新しいものに切り替えようとするそのエネルギーとは何であったのであろうか。そして、果樹栽培を中心とした生活を支えていたものとは何であったのであろうか。

はじめに

長野県中野市上今井地区における果樹栽培の経緯は、「果樹栽培導入の経緯とその展開～特産物を通じた地域づくり研究:長野県中野市上今井地区を事例として①～」(2010 年)[1]において述べ、1950 年代後半には、「りんご黄金時代」と呼ばれるまでに成長を遂げたリンゴ栽培の展開を明らかにした。また、1960 年代後半、果樹栽培は、国民の生活水準の向上に伴い、消費者ニーズの変化によって、量から質への転換が図られ、品種更新を行うなど、新たな展開がもたらされた、との指摘をおこなった。

高度経済成長期、上今井地区における果樹栽培は、機械化やインフラ整備など、新しい取組みが積極的に行われた。この頃、人々は結束し、次々に新しい取組みがなされた。そこには、戦後の若者たちのエネルギーが根源にあった。こうして、果樹栽培は 1960 年代後半まで盛り上がりを見せ、上今井地区におけるリンゴ栽培は軌道に乗った。

ところが、1970 年代、高度経済成長によって果樹栽培は転換期を迎えた。すなわち、果物の値段が下がり、これを品種更新によって乗り越えたのである。その実態はどのようなものであろうか。そして、この果樹栽培を中心とする生活を支えていたものは何であろうか。本稿は、「果樹栽培導入の経緯とその展開」に引き続き、長野県中野市上今井地区を事例として取り上げ、1970 年代の果樹栽培を支えていたものは何かを、日記及び聞き取り調査を基に明らかにすることを目的とする。

1、新品種への更新の試み

高度経済成長の影響を受けて、当時の主要品種である「紅玉」・「国光」が販売不振となり、従来のリンゴ栽培はかげりを見せるようになった。リンゴの生産量(収穫量)は全国で 100 万 t を超えたが、リンゴ価格は下がり始めたのである。当時の様子を藤田芳彦(1928 年生まれ)[2]は

次のように話す。

「リンゴの収穫量は、85 万 t～90 万 t 位がちょうどよい量だといわれていたが、100 万 t を越えるようになっていた。1968 年頃、3 箱(1 箱 18kg)で 1,000 円という値段がついたこともあり、これではやりきれない、という話になった」

その時期、果物類の生産量の増加[3]と輸入果物の圧迫[4]により、果物全体が過剰基調となっていた。また、高度成長期に入ると、消費者ニーズが変わり、味のよいものが求められるようになったのである。従来の量的拡大から、質的充実を求める動きがうかがえる。

こうしたリンゴ産業崩壊の危機を受け、長野県では、1968 年、県知事を本部長とし、県農政課を中心に、関係団体、市町村長など官民一体となって、「うまい果物づくり運動」が一大県民運動として展開された。この運動は、主に品種更新が目的であり、味のよい品種である「ふじ」・「つがる」を主要品種として多くの農家で導入し[5]、1970 年には全面更新が積極的に行われた。消費者に好まれるうまい果物づくりを目指して、品質の向上と新品種への更新が推進されたのである。

しかし、品種更新は、「うまい果物づくり運動」が始まる前から少しずつ行われていた、と藤田芳彦は話す。

「1959 年、上今井園芸組合が、農協の技術員の安田昇氏と他 3 氏に、栽培技術の指導を依頼した。上今井園芸組合は任意組合であり、当時、任意組合で技術員を雇ったのは珍しいことであった。上今井園芸組合は、設立当初から“共同選果”であったから、リンゴの品質が整い、周り(市場)からの評判がよかった。だから、技術員を頼んで更なる品質の向上を求めたかったし、(安田昇は)任意組合からの依頼に応えてくれた。俺はそのとき、組合の防除部のメンバーで、安田技術員と共に、調査部をつくった。そして、安田技術員が、“ふじ”という味のよい品種が開発された、といって“ふじ”の苗木を持ってきてくれた。 俺を含めて防除部のメンバー7～8 人が“ふじ”の苗木を一本ずつもらって試しに植えてみて、様子を見ることにした」

この苗木は、翌年の 1960 年には穂木[6]として使えるようになった。その穂木を接木してから 4 年目、1964 年に初めて「ふじ」がなった、という。これが、藤田芳彦宅での初めての「ふじ」への品種更新であった。この安田技術員から手に入れた苗木は、その後の全面的な品種更新において大きな役割を果たすことになる。なお、この苗木は植えてから 5 年目に初めて実がなり、50 年経った現在も健在である。

また、安田昇技術員のほか、小林長治(1912 年生まれ)が「ふじ」への更新の大きなきっかけをつくった、という。

「1960 年頃、当時、上今井園芸組合副組合長をしていたのが小林長治さんだった。長治さんは、副組合長として、県の販売会議などに出向いていた。長治さんは、そこで“ふじ”の穂木を手に入れた。そして、長治さんが“ふじ”を導入(接木)して 3 年目、1 箱 6,000 円という高値がついた。これは本当に驚いた。1 箱 300 円ぐらいとかいうどうしようもない値段だったのに、1 箱 6,000 円にもなるリンゴがあるなんて。本当にたまげた。こりゃあ、“ふじ”をやるしかない、やろうじゃないかっていう話になった。長治さんの影響はすごく大きかった」

上今井地区において、初めて「ふじ」への品種更新に成功した例であった。しかし、小林長治が使用した穂木は、ウイルスに感染していたため、数年後には枯れてしまい、植え替えをす

るという事態にまで追い込まれた、という。

「長治さんの穂木は、実はウイルスに感染していた木で、それを知らなくて、2～3 年後に枯れてしまった。長治さんは植え替えをした。安田技術員からもらった俺たちの苗木は無毒だったから順調に育ち、穂木もだんだんに増えていった。それから大きい木に接いで、またその木から穂木をとって別の木に接ぐ、というふうにやっていった。長治さんのことをみんなが見ていたから、ウイルスのない木を接木しないといけないんだとわかって、無毒の木を接ぐことに気を付けるようになった」

安田昇技術員によって、上今井地区に「ふじ」という新品種が知れ渡り、藤田芳彦はじめ、幾人かが「ふじ」の苗木を手に入れたことによって、「ふじ」の栽培が始まった。さらに、同時期に、小林長治が別ルートで「ふじ」の穂木を手に入れ、上今井地区において初めて品種更新に成功し、驚くほどの高値がついたことが刺激となり、「ふじ」への品種更新は加速したのであった。また、小林長治の失敗例は、のちの品種更新に関して、ウイルス感染を免れるための教訓となった。

小林長治の取り組みに刺激を受け、徐々に「ふじ」への更新が始まった。しかし、品種更新には接木が必要で、実がなるまでに数年かかる。その間、収入がなくなるため、一度に行うことはできず、リスクを恐れる人々もいた。そのため、品種更新はなかなか進まなかった。そのような状況のなかで迎えたのが、リンゴ価格の低迷、リンゴ産業崩壊の危機であった。そこで始まったのが、「うまい果物づくり運動」であった。藤田芳彦は次のように話す。

「“うまくだ運動”(うまい果物づくり運動)は、県が主体となってやったもので、収入が一時的に減るからという理由で、県が低利資金を融資してくれた。それから、安田技術員が“うまくだ運動”の間もずっと熱心に指導してくれた。戦後、ずっとみんながやる気になって取り組んできたのを見ていたから」

「ふじ」・「つがる」という高品質の品種が開発されて高値がついたこと、「うまい果物づくり運動」によって県が低利資金を融資したことが、全面的な品種更新へのきっかけとなった。そして、「ふじ」という品種を早い段階で手に入れて成功事例を示し、周りに広めた人がいたこと、親身になって長期間にわたり指導をした技術員がいたことが、全面的な品種更新を後押ししたのである。さらに、それらの根源には、戦後の若者たちのリンゴ栽培にかける情熱があり、「りんご黄金時代」と呼ばれるまでに成長させた、という誇りとやる気が支えとなり、そしてまた、技術員の心を動かしたのであった。

では、実際、どのようにして品種更新が行われていたのであろうか。

2、品種更新の普及

品種更新の様子は、藤田芳彦の日記[7](以下、日記)に次のように記載されている。

[1972/3/17]今日も四人で蓮に接木に行って来る。沖の畑を五時頃までやり終って、道端の畑二本ばかり剪定をして来る。穂木スター二 K(系)世界一、三本、ふじ若干を接ぎ穂から　資材もちょうどよかった。

[3/22]逆川南の畑の国光に接木

[3/28]清隆と二人で原に行き祝一本堀り取りをする　中々大変で清隆手伝ったので掘るだけ終る。

一子、南の方の国光にふじを接ぐ　終って北の大きい国光に二系無毒を接ぐ。

[3/31]一子　午前　逆川の接木の枝こなしや接木をやる　午後は二時まで昼寝をしてより清隆と逆川に接木に行き南の畑の角の国光に着色系を接木し、寒く早く帰る。

[4/4]午前　逆川に行き一子と二人で接木をする　南に国光に着色系、北には普通ふじを接いで来る

[4/5]今日は茂一さん、祐雄、隆と四人で厚貝に、国光の樹に接木に行く。七瀬の畑で一日で十三本やる。三〇本はやらなくてはならない。

[4/6]今日も四人で厚貝の接木に行く、ふじの穂木二 K(系)俺が出し持って行く　二〇本の台木全部六時一五分に接ぎ終る　ふじ五本接いでおく

[4/8]逆川に一子と車で行き接木をやる　南の畑角の国光に着色系を終らせ、北の方に来て紅玉にスターやふじを接いで来る

[4/14]午前、北原に行き、印度に金嶺を接木し、西の北　国光に世界一を若干接ぎ木して来る

このように、連日、品種更新のための接木が行われている。当時注目された品種、「ふじ」への品種更新が主になされている。上記の日記は 1972 年のものであるが、同年 2 月 14 日の日記に、＜祝いに接いだふじ成りそうだ＞との記録がある。1971 年以前に行われた接木[8]の成果がみられそうだと手応えを感じている。接木の結果がよい方向に向かったことで、翌年(1972 年)からの品種更新に積極的に取り組むことができたのであった。

1968 年に「うまい果物づくり運動」による全面的な品種更新が展開されたが、リスクを伴うこの取り組みは、一度に行わず、少しずつ分けて行った(図 1 参照)。そのため、日記では、1973 年以降にも接木の記録がみられ[9]、その記録は 1983 年まで続いている[10]。藤田芳彦によると、藤田家で最初に品種更新のための接木を行ったのが 1960 年頃である、という。実際に全面的な品種更新が行われるまでに、23 年という長い年月がかかっていたのである。藤田芳彦は次のように話す。

「全面更新といっても、植え替えだと実が付くまでに 5〜7 年かかるから、接木による品種更新がほとんどである。品種更新は時間がかかる。苗木を植えて、翌年から穂木がとれる。穂木を接いで 3 年目くらいからやっと実がなり始める。しかも穂木がたくさんないとできない。少しずつやっていったから、一年間で 2〜3 本しか更新しない人もいた。うまくだ運動が始まった 1968 年から(日記の始まる)1972 年頃は、穂木もたくさんできて増えたし、その間は接木全盛期だった」

また、藤田芳彦は、自身の畑の接木を行うと同時に、自身の畑以外で接木を手伝っていた(図 1 参照)。当時の状況を、藤田芳彦は次のように話す。

「1970 年を過ぎた頃、接木を頼まれてやることが多かった。うちは接木をしたのが比較的早くて、前例としてうまくいっていたから、他の家も(接木をしたい)と言って、頼まれて手伝いに行っていた。接木するには穂木が必要で、そのためには苗木が必要であった。でも、苗木を植える土地がない人もいたし、植え替えしているとまた時間がかかった。だから、俺の苗木がどんどん成長していたから、そこの穂木を使うことも多かった。それから、接木してうまくいった木から穂木として切って使うこともあった。そうやって接木できる穂木も増えていったから、品種更新が進み、広まっていった。この頃、上今井全体が、人を頼んででも接木をしよう、という雰囲気になっていた」

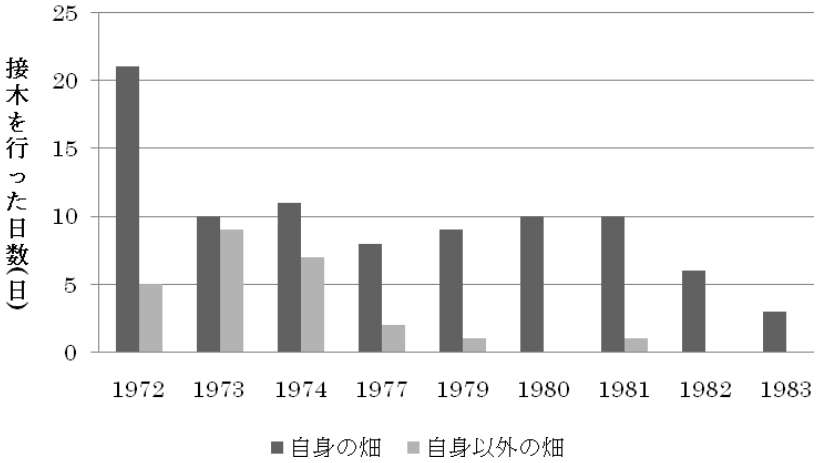

図 1　藤田芳彦による接木

※藤田芳彦の日記(1972 年～1983 年(1975 年、1976 年、1978 年は除く)、各年 3/15～5/15)の記録をもとに作成
※接木の管理や準備を行った日も含む。接木を行った本数は日によって異なる。

このようにして、早い時期に品種更新をしていた人々から、徐々に広まっていったのである。人に頼み、頼まれながら品種更新に取り組んでいたことが、日記からもうかがえる。

[1974/3/17]一子午前、原に行き全賀の畑からふじの穂を切って来る　又、清隆も、前島に行き徒長枝を切って来る　福男君に頼まれたもの

[4/12]今日もとし子さん達四人で全賀接木に行って来る。九時時分から小雨になり十時半まで無理してやるも駄目で帰る。家に来たら小雨になる。午後はよさそうなので又接木に行くも夕方まで小雨になり雨具をやり火を焚いてやって来る　十本が全部終り祝一本の半分だけやり半分が残る

[4/15]茂一、とし子さんを頼み、一子と四人で辰雄君の接木に前田に行って来る　ゴール十本をやるようになっており、王林スターをやる　午前中に四本が終り午後、三本終って残り二本半になる。王林は五本、スター五本の予定。いい日であった。後、三人で半日か。

また、1973 年 3 月 28 日の日記には、＜夜、小林清江さん、接木を頼むと一升持って来、話して行れる＞との記録がある。「一升」とは酒のことである。そうして頼まれた人の接木を行っていった。ほか、1974 年 3 月 25 日の日記には、＜昨日の四人で蓮に剪定に行って来る。(中略)午後は四人で接木をやる。(中略)6 時過ぎに終り　又、夕食を御馳走になって来る。刺身を山程カツ煮魚等大変な御馳走で食べきれず＞との記録がある。数人で接木を手伝い、終ったあとは接木を頼まれた人の家で食事や酒をごちそうになっていた。「大変な御馳走で食べきれず」と、それほどのもてなしがなされ、それほど接木をしたことが喜ばれたのであった。そしてその飲食の場は、意見を交わす場でもあり、コミュニケーションの場でもあった。果樹栽培を盛んにして、地域をよりよいものにしていきたい、という思いが、人々の絆を築いていったのであった。

藤田芳彦は続けて話す。

「1978 年には、“ふじ”が 1 箱(=18kg)4,500 円という価格がついたことから、品種更新はさらに加速した。高値だったし、家を建てたのがこの年だったから、4,500 円という値段だったことはよく覚えている。今は逆に“ふじ”が増えすぎてリンゴ全体の 6 割を占めていて、1 箱

1,600 円という時代になってしまって、“ふじ”を減らそうなんて言ってるんだから、当時どれだけ高値だったことか。品種更新がうまくいった、高値がついた、ということは、経済的にも潤う。そうすると、ますます熱が入る。力が入る。いい循環だった。家を建て替えたのは、当時、子供が就職して結婚する前だったし、家を建てるなら今しかない、と思った。家を建てようと、それくらい思いきれたということは、それくらい勢いがあったということ。この頃、うち以外にも上今井地区で毎年 4～5 軒ずつ家を建て替えていた。家を建て替えるブームみたいになっていた」

それほどまでに品種更新は確実な成果を収め、ますます品種更新は進み、地域は勢いづいていたのであった。

長年にわたる品種更新を、藤田芳彦は以下のように振り返った。

「どんな品種も先から末端まで浸透(普及)していくには、10 年かかる。それだけ差がある。今は情報化社会だから、すぐに情報が手に入る。例えば、今は携帯電話が普及していて、畑にいたとしても青森の様子を聞くことができたりする。昔は電話すらなかった[11]。昔は、○○という品種がいい、とか、そういう情報は“りんご研究会[12]”など、人との交流で手に入れるしかなかった。人と直接会って話すしかなかった。大変だった。技術員も、今ほどの腕がなかった。だから、当時の品種更新も時間がかかった。でも、(品種更新に)関心があったから必死に情報収集しようとした。それは今も同じで、やっぱり関心がないと情報は集まらない」

全面的な品種更新に至るまでには長い年月がかかり、さまざまな苦労があったが、人々は助け合い、一体となって取り組んだ。また、直接的な交流によって情報や意見を交換し合った。そこには、どうにかしてリンゴ栽培をよりよい状況にしたいという人々の熱い思い、強い意志があった。そうした意志が、人々を動かし、品種更新は普及していったのである。

そして、藤田芳彦は、ぜひとも伝えておきたい、といって、品種更新を行っている時代の忘れられないエピソードとして、わざわざ紙を取り出して以下の言葉を書き出した。

「末端まで行くには 10 年もかかるとのこと。其の当時、県の果樹試験場の竹前四郎技師に、上今井にはまだ国光があるのかと云われたことがある」

「上今井にはまだ“国光”があるのか」、藤田芳彦は、この言葉が非常に印象的であった、という。

「長野県全体として、品種更新がどんどん進んでいるのに、上今井は遅れている。それだけよそでは品種更新をやっているのに、“国光”なんてものをまだつくっているなんて、遅れている。“国光”の時代はとっくに終わっている。そういう意味で言われた、と俺は思っている。深い意味だったから印象的だった」

竹前技師の言葉は、品種更新が始まって 10 年もの長い年月を経て吐き出された言葉であった。ひとつの区切りを示した言葉、すなわち、「国光」が終焉を迎えたことを意味する言葉であった。

このようにして、新品種への転換は成功を収め、リンゴ産業崩壊の危機を脱することができたのであった。

3、わい化栽培

「うまい果物づくり運動」の一環として、品種更新のほかに、わい化栽培が導入された。

わい化栽培とは、わい性台木[13]を利用した栽培方法である。木の高さが低いため、作業しやすいほか、通常の木より早く実をつける[14]。また、わい化栽培では、多数の木を植えることができる[15]ため、収穫量は増えることになる[16]。こうした利点から、長野県では、1971 年からわい化栽培の試験が行われていた。そして、1976 年から一般に導入された。県では、省力、早期収入、優良品生産が可能な高密植並木植えに焦点をしぼり、研究がなされていた。以来、試行錯誤を繰り返し、県からの低利資金貸し出しの補助もあり、わい化栽培面積は、1981 年には県全体で 1,423ha に達し、全国一のわい化栽培面積を誇るようになった。そこで、藤田家のわい化栽培とその視察について注目してみたい。

以下の記録は、藤田芳彦がわい化栽培の視察に訪れたときの記録である。

> [1972/7/10]今日は生産部防除部合同の視察に行って来る　八時集合で長野観光のバスで試験場に行って竹前さんの案内で見て歩き　ワイ性を見たりして来る。ワイ性台 EM 九がよく、将来其の時代が来ると思う　十一時頃、園試を出、二本木の日曹に行き昼食をやり　話を聞いて、バス中を廻ってみて、松ヶ峯をバスで廻って見て、妙高温泉に来て香国園にて酒宴をやり、六時近く出発、帰途に付く　いい視察だった

この日は試験場での栽培技術に関する視察であった。今回の視察がよいものだったと記している。日記に記載されている「ワイ性」とは、わい性台木を利用したわい化栽培のことである。「ワイ性台 EM 九[17]」とは、わい性台木の種類を指しており、＜将来其の時代が来ると思う＞と、視察によって、栽培技術の動向を先見していた。県によりわい化栽培の試験が行われたのが 1971 年であり、藤田芳彦が視察をしたのが翌 1972 年である。その 4 年後、一般に導入され、後に長野県は全国一のわい化栽培面積を所有することになったのであるから、藤田芳彦の先見性は確かなものであった。当時の視察の様子を、藤田芳彦は次のように話す。

「わい化栽培は、木が小さく、作業しやすい。わい化栽培は、もともとヨーロッパの方法で、試験場の人がヨーロッパに行った際に、この方法ならいいんじゃないか、やってみようという話になった、という。今後、リンゴ栽培を行う人が年をとって作業が大変になるから、高齢になっても簡単に作業ができるように、といって取り入れられたものであった。木は小さくて、作業が安全で、おいしいものが採れる、と(試験場の人から)聞いたから、よさそうだ、と思った。それに、わい化栽培は長野県で推奨していたため、低利資金の貸し出し等の補助があった」

そして、同時期、米の減反政策が行われていた。当時、減反政策の影響で、米に替わるものを探していたときであった。そこで、上今井地区では、田であったところを畑に替え、そこでわい化栽培を行うことにしたのである。こうしてわい化栽培は、県からの補助があったほか、品種更新の時期や米の減反政策とも相まって、増加したのであった。

しかし、結果としてこの取組みは、上今井地区では思い通りにいかなかったようである。藤田芳彦は次のように話す。

「俺を含めて 5～6 人で、上今井地区でわい化栽培の委員会をつくった。当時、米の減反政策をしていたから、この影響が大きかった。米に替わるものを探していたときだった。だから、1976 年頃、田んぼであったところをわい化栽培用の畑に替えた。上今井地区では、わい化栽培の面積は 5ha くらいになった。しかし、やってみたものの結果的にはうまくいかなかった。もともと田んぼだったから、土地(土壌の状態)がよすぎてしまって、わい化栽培には向かなか

った。木が大きくなりすぎてしまった。しかも、針金を使ったりして、通常の木に比べていろいろ準備がかかって大変だった。さらに、品種選びにも失敗してしまった。県で“千秋”という新品種を勧めていたから、植えてみて、3 年後、実がなった。味はよかったけど実が割れてしまった。そのとき、これではだめだ、という話になった。もっと研究しておけばよかったなぁ、と思う」

田であった土地は、わい化栽培には適さなかったのである。また、「千秋」という品種は味はよかったが、実が割れてしまい、商品にすることができなかった。そのため、現在は「千秋」はほとんど栽培されていない。

現在も長野県ではわい化栽培を推奨しており、栽培面積は多い。しかし、上今井地区においては、現在、わい化栽培を行っている人はほとんどいない。1980 年頃から、わい性台木を切り、通常のリンゴの木に切り替えるか、またはモモやプラムに替えた、という。現在、藤田芳彦宅のわい化栽培を行っていた畑には、モモが植えられている。1982 年、1983 年の台風によってリンゴ栽培が大きな被害をうけたことで、複合経営に注目が集まったことが大きなきっかけであった。そのほか、リンゴよりモモやプラムの方が植えてから早く実がなるということ、土地が川沿いで浸水の被害に遭いやすく、台風の被害が多い秋を避けて収穫できる品目である、といった理由がある。

このように、1970 年代、品種更新とわい化栽培の導入は、上今井地区における果樹栽培において大きな変化をもたらした。品種更新によって、リンゴ産業崩壊の危機を乗り越え、一方では、わい化栽培が思い通りの成果が出ず、結果的に失敗に終わった取組みもあった。

1970 年代、農業の撤退や兼業化が進むなかで、リスクを背負ってでも専業農家として果樹栽培を続けていこうとする人々はどのような思いであったのであろうか。当時、リンゴ産業は危機的な状況に置かれており、農業から離れていく人も多かった。しかし、藤田芳彦は果樹栽培から離れることはなかった。

「価格低迷のとき、40 歳くらいで(働き盛りのときで)、まいったなと思ったけれど、タイミングよく“ふじ”が出たし、品種更新のときには(教え合って)みんなが接木できるようになったし、農業はやり方次第でどうにでもなるということがわかった。手をかければかけるだけ成果は出る。そんな部分に俺は果樹栽培のおもしろさを感じた。人間、生き方はさまざまだけれど、俺は農業のおもしろさを知ったから、好きだったからやめなかった」

戦後の若者のエネルギーが一大産業をつくりあげ、切磋琢磨しながら取り組んできた当時の経験が、藤田芳彦の心に根づいた。そして、その経験が、果樹栽培を続けるきっかけとなった。また、果樹栽培に対する確立した思いが、さらなる果樹栽培への探求心と向上心へとつながったのであった。

4、果樹栽培を支えていた女性の役割

果樹栽培を行っていくなかで、共に果樹栽培に取組み、果樹栽培を中心とする生活を支えていた女性の存在を忘れてはならない。藤田芳彦は次のように話す。

「果樹栽培において、女の人たちの果たす役割は非常に大きかった。果樹栽培には、収穫や摘果、荷造りとか、いろいろな作業が必要だ。現場で働く人の力、これが重要であり、その力

が非常に大きい。家の仕事は女の人がやっていた。それに加えて女の人は、摘果も葉摘も収穫も、一通りのリンゴ栽培の作業を一緒にやった。男の人は、会議に出席したり、消毒に行ったりするから、その間、女の人が作業して、活躍していた。自然に役割分担みたいなものができていた。ご婦人の働きは本当に大きかった」

女性は、果樹栽培における一連の工程を覚え、男性と共に果樹栽培に勤しんだ。そして、男性が会議や消毒等で不在の場合には、女性が積極的に作業を行い、果樹栽培を補っていたのであった。

1960 年代後半から始まった品種更新においても、女性の活躍が目立った。品種更新の頃の様子を藤田芳彦は次のように話す。

「女の人も接木の仕方を、園芸組合や接木の方法を知っている人から教わったりして、接木できる人が増えていった。女の人は朝早くから一日中やっていた。みんな力が入っていた。それでも品種更新に 10 年もかかったのだから、女の人の力がなかったらどうなっていたことか」

藤田芳彦の妻、藤田一子(1933 年生まれ)[18]は次のように話す。

「品種更新のときは、接木の仕方を覚えて、じいちゃん(藤田芳彦)が切った木を接木していった。接がないと間に合わないからどんどんやった。上今井全体が接木をやろうっていう気になっていた。朝ご飯作って、畑に行って、昼ご飯作って、また畑に行って、またご飯作って、という感じだった。近所の家の畑の接木を頼まれて、夫婦で手伝いにいったこともあった。子どもの面倒は、ばあちゃん(姑)がみてくれた。ばあちゃんが子守をしてくれたから農作業ができた」

また、上今井地区全体の果樹栽培のレベルの向上を図り、女性による先進地への視察が度々行われた。藤田芳彦は次のように話す。

「園芸組合では、ご婦人の協力が非常に大きいという話になって、婦人たちによる先進地や市場への視察、講習会等をやった。リンゴ栽培のレベルの引き上げを図った。呼びかけると、参加者は大勢集まった」

上今井地区では、園芸組合主催による「婦人視察」が度々行われていた。当時の様子を藤田一子は次のように話す。

「園芸組合では“婦人視察”というのがあって、松本や川中島(長野市)の優良園を見に行った。上手に剪定してある木や、実がなった状態の木を見てきた。それから、よそ行きのパンタロンスーツを着て、汽車で東京市場に 60 人くらいの大人数で視察に行ったこともあった」

男性の視察では、剪定等の技術を学んだ。そして、市場では、価格や品種、品質を視察することで、今後の見通しを立て、品質向上のための研究や品種更新に役立てた。一方、女性の視察では、剪定が完了した木や実がなっている状態の木を視察し、優良の木とはどのような状態かを実際に見て学び、市場では、他の地域の品物の質や価格を知ることが刺激となり、果樹栽培に対する意識の向上と果樹栽培のレベルの引き上げを図った。また、60 名も参加するほど、女性も果樹栽培に対して力が入っていたのであった。

続けて、これは絶対に書いてはいけない、と藤田一子は真顔で念を押した後、次のように話した。

「視察のあとはいつも慰労会があって、温泉に行っていた。早く温泉に行きたかった。早く

視察が終らないかな、と思うほどそれが楽しみだった」

女性たちは視察のあとの慰労会が楽しみであった。慰労会では、男性は、栽培技術や経営のことなど、仕事が主な話題であるのに対して、女性は、健康面や子供のこと、家庭のこと、近所のことなど、話題は多様で、世間話が多かった。そういった、たわいのない会話を交わしながら笑い合える時間を持てる慰労会は、女性達にとっての息抜きの場でもあり、楽しい交流の場となっていたのであった。

このように、果樹栽培を中心とした生活を支えていた女性の役割は非常に重要なものであった。以下の日記は、藤田芳彦による藤田一子についての記録である。例として、1974 年 3 月の記録を掲載した。(以下に掲載していない日は、日記に記載されていない。)

［3/3］一子　午前逆川の枝こなしに行き　午後は中学の PTA に行って来る
［3/4］一日　逆川の枝こなしに行って来る
［3/8］午前　歯医者に行って来て　逆川の枝こなし。王林の穂、一子園芸組合より買って来る
［3/10］午前　原の枝こなしに行き　午後は婦人会の役員会をやりに行って来る
［3/12］コーラスで公民館に行って来る
［3/13］午前　原の枝こなし　午後　中学 PTA で行く
［3/14］逆川半分枝焚きをやる　午後はやしょうまを作る
［3/16］午前　北島に行きアスパラを刈って　午後は雨が降ったので上道の利一家に遊んで来る
［3/18］夜婦人会
［3/19］午前　桃畑の枝こなしに行き午後は北原に枝こなしに行ってくる
［3/22］一日婦人会総会で行って来る
［3/24］朝お墓参りに行って来る。それより房子に見舞いに缶詰を持って顔を出して来る。又、歯医者に行き、午後は前島に枝こなしに行って来る
［3/25］一日中央公民館に行って来る
［3/28］中野に行きゲソやホーレン草等買い　片塩に寄って来る
［3/30］午前逆川に行き炭を袋に入れ　それよりせい子と原に行き枝焚きをやり全部終わったと云う　午後は婦人会で温泉に行く

農作業を中心に、食料品の買い出し、食事の用意など、女性は家事全般を担い、生活面を支えていたのであった。そのほか、見舞いや野菜の種まき、収穫などを行っていた。また、農作業の傍らで、PTA の会合や婦人会、料理講習会への出席、祭など行事のための準備等[19]、さまざまなことをこなしていたのであった。男性は、一家の大黒柱として生計を立てるために、果樹栽培に全力を注いでいた。その一方で女性は、家で食べる野菜を作ったり、買い物に行ったりと、生活には欠かすことのできない細かい部分を支えていたのであった。

果樹栽培は、女性の働きが大きな支えとなっていたのであった。男性が農業一筋に真剣に取り組めるのは、女性の協力があってこそのものであり、その支えによって暮らしを成り立たせることができた。女性が生活基盤をしっかり築き、暮らしを守っていたからこそ果樹栽培を成り立たせることができたのであった。

5、まとめ

中野市上今井地区では、1960 年代後半、高度経済成長の影響により、当時の主要品種であ

る「紅玉」・「国光」の価格が低迷し、リンゴ産業崩壊の危機に陥った。そうした状況を受けて、上今井地区では全面的な品種更新に踏み切った。「ふじ」への品種更新を主な目的とする一大県民運動、「うまい果物づくり運動」が展開されたのである。加えて、農協職員の安田昇技術員、上今井園芸組合副組合長の小林長治の存在と活躍は大きい。両氏は、「うまい果物づくり運動」以前に上今井地区における品種更新のきっかけをつくったのである。安田昇技術員は、質のよい新品種「ふじ」の苗木を幾人かの組合員に配布し、同時期に別ルートで小林長治が「ふじ」の穂木を手に入れたのであった。小林長治は上今井地区において初めて「ふじ」への品種更新に成功し、驚くほどの高値がついたことで、人々に刺激と希望を与えた。

「うまい果物づくり運動」では、県からの補助のほか、安田技術員の熱心な指導と小林長治による品種更新の成功事例が、上今井地区における品種更新の大きな支えとなった。人々の心を支えていたのであった。そしてまた、品種更新に取り組む人々の根源には、戦後の若者たちの情熱があった。そして、「りんご黄金時代」と呼ばれるまでに成長を遂げた、という経験と誇りがさらなる活力となり、その姿勢は技術員の心をも動かしたのであった。

品種更新には、10 年以上の長い年月を要した。早い時期に「ふじ」への品種更新を行っていた人から、徐々に広まっていき、人に頼み、頼まれながら、地区全体で品種更新のための接木に取り組んだ。当時、接木を手伝った際には、食べきれないほどのごちそうがもてなされるなど、それほどまでに接木をしたことが喜ばれた。また、飲食の場は、意見を交わす場でもあり、果樹栽培を盛り上げようとする人々の絆をより強いものに築いていったのであった。

このようにして「ふじ」への品種更新は着実に行われ、のちに家の建て替えブームが起こるほどに品種更新は成功を収め、地域は勢いづいていたのであった。そこには、一致団結して取り組む人々の姿があった。地域一体となって協力して取り組むことで、地域全体が勢いに乗ったのであった。

そして、品種更新が始まってから 10 年後、「上今井にはまだ“国光”があるのか」、と県試験場の竹前四郎技師が残した言葉は、「国光」の時代の終焉を意味するものであった。品種更新によって果樹栽培における新たな時代が生まれ、リンゴ産業崩壊の危機を脱したのであった。

一方では、失敗した取組みもあった。それは、「うまい果物づくり運動」の一環である、わい化栽培の導入である。わい化栽培は、省力、早期収入などの理由から、県が推奨したのであった。また、品種更新や米の減反政策の時期とも相まって、わい化栽培は増加したのであった。しかし、土地の条件がリンゴ栽培に適さず、品種選びを誤ったことから、結果的に上今井地区におけるわい化栽培への取組みは失敗に終わった。

1970 年代、農業の撤退や兼業化が進むなか、リスクを背負ってでも果樹栽培を続けていく人々は、強い意志と覚悟を持っていたのであった。それは、戦後の若者のエネルギーによって一大産業が築かれ、切磋琢磨しながら取り組んできた当時の経験が心に根づいていたからであった。その経験と、試行錯誤を繰り返すなかで、やればやるだけ結果として表れる農業におもしろさを感じるようになったことが、果樹栽培を続ける大きな原動力となった。また、果樹栽培に対する確かな思いが、さらなる果樹栽培への探求心と向上に向かわせたのであった。

そして、そんな男性の思いを受け止め、果樹栽培に取り組み、生活を支えた女性の存在は非常に重要である。女性たちは、男性と共に果樹栽培の一連の作業を行い、男性が不在の場合に

も対応した。また、「婦人視察」を行うなど、女性たちも果樹栽培に対して積極的であった。それは、地域全体としての果樹栽培のさらなるレベルの引き上げを図るものであった。視察後には毎回慰労会が行われ、世間話を交わすなかで、自然と人々のつながりは深まり、果樹栽培への活力へとつながっていったのであった。さらに、女性は家事全般を担っていたほか、行事の準備や講習会等をこなしていたのである。女性は、仕事に全力を注ぐ男性を支え、生活基盤を築き、暮らしを守っていた。そのようにして、果樹栽培を中心とした生活を成り立たたせていたのであった。

1970 年代、農業の撤退や兼業化が進むなかで、上今井地区においては、全面的な品種更新に踏み切り、専業農家として生きる道を選択した農家が少なくなかった。そこには、果樹栽培を盛り上げて地域をよりよいものにしていこうとする人々の情熱があった。それは、戦後、人々が一致団結して、努力に努力を重ね、一大産業を築き上げたという経験と誇りから生まれたものであった。そして、その情熱は、人々の心を動かし、互いに支え、協力し合い、やがて地域全体を動かすまでのエネルギーとなっていったのであった。

注

1) 藤田りよ子「果樹栽培導入の経緯とその展開」(『愛知淑徳大学 現代社会研究科研究報告』第 5 号、2010 年、所収)
2) 筆者の祖父である。
3) 『食料需給表』農林統計協会(1984 年)p126～127 参照
4) 1963 年バナナ、1964 年レモン、1969 年台湾産ポンカン、1971 年グレープフルーツが輸入自由化となった。(農林水産省「作物統計」参照)
5) 県が低利資金を融資していた。
6) 接木に使う枝
7) 1972 年から始まっている。1971 年以前の日記は見当たらない。
8) 藤田芳彦宅では、1960 年頃から「ふじ」の接木を始めた。
9) 1975 年、1976 年、1978 年の日記はないため、その年の記録はない。しかし、藤田芳彦によると、その年も接木は行われていた、という。
10) 1983 年 4 月 28 日の日記に、＜これでやっと接木の予定が終わった。＞と記録がある。
11) 1972 年に電話加入した。
12) 青年を含む有志 15 名で結成された研究会。主にリンゴの栽培技術の向上を目的とするものであった。活動は 1985 年頃まで続いた。
13) 接木をコンパクト(小型)にした台木
14) 農文協編『果樹園芸大百科 2 リンゴ』「わい化栽培の技術」参照
15) 10a あたり 125 本程度
16) 農文協編『果樹園芸大百科 2 リンゴ』「わい化栽培の技術」参照
17) ワイ性台 EM 九＝わい性台木 M9　日本では、いずれの県も M26 台が最も多い。次いで M106、M9 となっている。長野県では、M26 または M9 の使用がほとんどである。長野県では、1981 年の時点で、M26 によるわい化栽培面積が 1,191ha、M9 によるわい化栽培面積が 228ha となっている。(農文協編『果樹園芸大百科 2 リンゴ』農山漁村文化協会(2000 年)参照)
18) 筆者の祖母である。
19) 藤田芳彦による日記(1972～1974 年)参照

参考文献

・上今井園芸組合 50 周年記念誌編集委員会『五十年の歩み』上今井園芸組合(1983 年).
・『食料需給表』農林統計協会(1984 年).
・豊田村『ふるさとのあし音』(1987 年).
・『日本長期統計総覧第 2 巻』日本統計協会(1988 年).
・農文協編『果樹園芸大百科 2 リンゴ』農山漁村文化協会(2000 年).